

個を捜し求める神

マルコによる福音書14:36 ルカによる福音書15:4-6

子どもに対してしてはいけない三つのこと。①子どもをいじめる。②子どもが失敗しないように先回りする。③子どもの親離れを許さない。④子どもに嘘をつく。①～③は分かりますが、④はどうでしょうか？嘘も方便、子どもには黙っていたほうが良いことがあるのではないのでしょうか？たとえば離婚。「お父さん帰ってこないね？どうしたの？」という子どもの問いに、「単身赴任よ」と嘘をつく。このとき、子どもの心には何が起こるのでしょうか？子どもは何か変だと直感します。それはそうです。一緒に暮らしていれば分かります。でもそこでお母さんが、なんでもないとはいえ、自分の直感が信じられなくなります。そして自分で考えることをやめてしまう。真実が知らされないというのは、自分で決断することができない状況です。子どもの心の成長はストップしてしまいます。つらいことでも真実に直面しないように育てられた子どもは、青年になったときに自立できないということが突然表面化します。自分で考え判断できない大人になる。指示待ち人間です。では、幼児が死に至る病だったらどうでしょうか。告知しますか？しないと子どもの心に何が起こるのでしょうか。離婚の場合と同じことが起こります。何かを変だと感じる。でも親は「治そうね」と言うばかり。自分の直感が信じられない、自分で考えることができない、どう生きるか決断できない。人として十分に生きられない。つまり、魂の死です。肉体が死ぬ前に、魂が死ぬ。

「魂の体験」というべきものがあります。自分というものへの気づきです。自分がいるということに俄然、不思議さを伴って気づく。いわゆる自意識の芽生えです。私にも「魂の体験」がありました。自分に心があることに俄然気づいたのです。それは恐ろしい体験でした。2歳くらいのことだったと思います。築山のような、確か草が生えていたような場所で、何人かの子どもたちと遊んでいました。他の子達は、心と体が一つになって、思うままに遊んでいましたが、わたしは心のままに動けない。まるで起動戦士ガンダムのモビルスーツの中にいるようでした。うまく操縦できないロボットの中にいるよう。私の運動神経の鈍さは、多分この頃からのもので、脳機能に若干の障害があったのだらうと推察されます。でもそのおかげで早期に自己存在に気づくことができたのかもしれない。それは不思議な感覚で・・・と言うよりむしろ、非常なストレス体験でした。この宇宙に自分はたった一人しかいない。子どもの頃、時々、このいいよのない恐怖に襲われたものです。

わたしは中3で自覚的に教会に行くようになりました。聖書を読み始めました。教会に行くたび心が整う感じ、清くなった感じがしたのです。聖書を読むと学校の勉強とは全然違う知識を得ました。心についての新しい知識です。平安が訪れました。はじめて「平安」というものを実感しました。自分は神様が作ったんだ、神様がいつも共にいて守っていてくれるんだと考えることができたのです。そして洗礼を受けました。母が言ったものです。「今まで黙っていたけど、あんたは夜うなされてたのよ。でも、このごろうなされなくなったね。」

私が分かったこと、それは「魂の尊厳」ということです。自分は限りなく尊い。その直感があったものの、それは自分にとってであって、世間にとってじゃない。親や家族にとっては大切だったかもしれないけれども、これから自立して親離れしようとしているときに、親は支えにはなりません。自分が自分の能力を高めること以外、誰も自分の尊さを保障してくれなかったのです。世間には条件付きの愛しかないと思っていたのですから、心の平安がないのは当たり前ですよ。でも、神様がこれを保障してくれたのです。「あなたはあがままで尊い」。無条件の愛です。

一匹の羊。イエスの説教にでてくるたとえ話です。羊飼いの不合理な行動が目につきます。普通なら99匹のために1匹くらいいなくなるのは残念だが仕方がないと思えるのではないのでしょうか。99匹を野原に残してなんていうことはしません。ライオンなどの野獣から羊を守るのが仕事なのに・・・。もっとすごいのは、1匹を見つけたら99匹のところには戻らず、そのまま家に帰ってしまうところで

す。99匹はどうなったのでしょうか？ イエス様はあえて語りません。これは何を意味しているのでしょうか？「神は個を捜し求める」ということです。神は集団を捜し求めない。

これが人権の基本です。キリスト教の伝統の浅い日本人は人権意識が分からない。戦後個人主義になりましたが、また逆戻りしていく風潮がこのところ顕著です。なぜだろう？と考えてきました。どうして戦後の民主主義が全体主義に逆戻りしていくのでしょうか。それは、個人主義が欲望を中心にしたからです。快樂を求め 苦しみを避けることが個人主義だと勘違いしたからです。せん後とどまることのなかった右傾化の背景には、人心の退廃という危機感がありました。身勝手な人が多くなった。真の個人主義は、個の尊厳、つまり「神と一体となった個」という思想がなければ成立しません。日本の教会もこの点が希薄でした。集団主義的信仰理解だったのです。だから自分で考えない牧師や信徒が多い。派閥争いとその現れです。やれ社会派だ、やれ福音派だ……。一匹狼になれないのです。個になれない。

神はあなたを捜し求めておられます。あなたと直接つながろうとしておられる。集団を介してではない、つまり教会を介してではないのです。教会という宗教団体に属することによってクリスチャンになるわけではありません。神様と直接に「我と汝」の関係になること。直接、個人として、祈ることができるようになることです。マルコ14:36では、イエスが「アッバ」と神に呼びかけています。アラム語で「とうちゃん」という、いわば幼児語です。すごく親しい関係を現しています。旧約聖書にはこのような呼びかけをする祈りはありません。イエスが持ち込んだ神への呼びかけです。イエス以後、わたしたちもこのように呼びかけることができるようになりました。宇宙を創造した全能の神はあなたと、あなたの魂と、つながることを求めておられます。